

20 戦後日本における高等教育の構造

- | | |
|---------------|--------------|
| (1) 戦後高等教育の変貌 | 東京大学 清水義弘 |
| (2) 高等教育の地域構造 | 国立教育研究所 天野郁夫 |
| (3) 指導者養成 | 東京学芸大学 麻生誠 |

（著者）　（執筆者）　（題名）

戦後20余年を経た今、わが国の高等教育は再編成期をむかえている。ここでは特に四年制大学を中心に、その地域構造に焦点をおき、再編成の必要とその方向を探つてみたい。大正期にはじまつた高等教育の大衆化の過程は、現在369校の大学、11.6万の在学者をもたらしているが、このマンモス化した高等教育の地域構造が、さまざまの問題をはらんでいることは周知の通りである。私立大学の東京をはじめとする大都市地域への過度集中の弊害が叫ばれてすでに久しい。ここでは、そうした問題や弊害を開拓していくための手掛りを、大学のはたしている社会的機能のなかにさぐつてみたいのである。

戦後の高等教育改革のなかで、わが国旧来のエリート養成体系は崩壊したといつてよい。しかし、高等教育の指導者養成機能は極めて重要なもので、高等教育はこの機能を放棄してしまうことはできない。今回の発表では、戦後の新高等教育の体制のなかで、どのような形で高等教育の指導者養成機能が残存し続けているかという問題を、戦後の新制東京大学卒業者の追跡調査によつて明らかにしてみたい。特に時間の関係で「新制高等学校→新制東京大学→国家→寡占資本組織における昇進慣行」の実態を中心に述べてみようと思う。